

今井むつみ先生の講演を聴講して思うこと

(令和7年12月さざなみ寄稿)

高知県須崎市教育委員会教育長 竹内 新

須崎市教育研究所発行のさざなみ(令和7年度第9号)で取り上げられている今井むつみ先生は、中央教育審議会の教育課程企画特別部会委員でもあり、9月5日の同部会でも今回の講演に繋がるような話をされていました。県教育委員会のご厚意で、私も出席させていただきました。本当にありがとうございました。

ここからは感想と私見です。

教員は子どもたちに「よく読んで！」と声かけをしますが、それだけで読めるようになることはありません。気をつければ正しく読める状態と、読めない状態は全く異なります。もしかすると、文字が分かって発音できているのだから読めていないはずがないと考える教員もいるかもしれません。

さて、10年近く前に話題となった『AI VS. 教科書が読めない子どもたち』の著書の新井紀子先生という数理論理学者がいます。人工知能の開発を通じて、新井先生は「誰もが教科書の記述は理解できるはず」というそもそもの前提に疑いを持ったため調査したところ、50%台の結果にとどまる項目もあったとのことです。文部科学省で長らく教科書検定の仕事に携わっていた身としては、教科書を手にした子どもたちの半数はその内容を正しく読み取れていないという指摘に、当時大きな衝撃を受けた記憶があります。新井先生は、その結果を踏まえてリーディングスキルテスト(RST)を開発(このテストは現在多くの学校・企業で使われるようになっている。)するとともに、「教科書に書かれたことを理解できないのに、アクティブラーニングでどうして自ら調べられるのか」と警鐘を鳴らしていました。それに対して今井先生は認知科学・言語心理学者ですが、読解力について考える上では、新井先生と似た系譜の上にあるのではないかと、私は勝手に想像しています。

さざなみ本編に示された問題(『算数文章題が解けない子どもたち:ことば・思考・学力』(岩波書店)などでも確認できます。)は、問われた意味について具体的にイメージすれば「ああ、こういうことか」と理解できる良問ですが、こうした問われていることの意味が分からないと正答できない問題は、いわゆる「ひっかけ問題」として、教員から忌避されがちです。もちろん、そうした出題をすると正答率が低くなって、成績がつけにくくなるので、教員も困るかもしれません。でも、それは裏を返すと、その授業・単元の目標に十分には到達させられない子どもがそれだけいるともとれます。

計算とは「+ - × ÷」の四則演算です。発達段階に応じて多くの子どもがそれなりにできるようになるものです。

学習指導要領的な表現で言えば、「…の計算ができるようになること」の方は及第点なのでしょう。けれども「…を日常生活に生かすこと」の方は大丈夫ですか、と言った感じになるでしょうか。学んだ知識がその教科の中で完結してどこにもつながらないというのは、子どもたちにあえて生かせない形で身に付けさせてしまっている状態なのかもしれません。この問題は、以前より上智大学の奈須正裕先生が言う「オーセンティック(真正)な教育」にも通じています。あるいは、算数の授業の中で国語を生かし、国語の中で社会を生かし…(算→国→社→理→英→算)…といった学びの連環ができれば少しは違ってくるかもしれません、だいぶ工夫が必要ですが。

この日の話の中では、時間の関係であまり触れていただけず残念でしたが、今井先生はこうした問題に向き合って、「たつじんテスト」(小学生版として「ことばのたつじん」「かず・かんがえるたつじん」の2種類。中学校版もある。)を教育機関向けに無償で提供してくださっています。さらに今井先生は、大人から教えられた知識を子どもたちはすぐに使い始めることができず、体で覚えて自分のものにするという段階が必要とも言っています。そのため、遊びながら反復して身に付けられるよう、時計のカルタや分数のトランプなども考案しています(『学力喪失——認知科学による回復への道筋』(岩波新書)の巻末に問い合わせ先があります。)。

学校は勉強を教えるところです。子どもたちに自己肯定感を持たせるには、非認知だけを取り出して扱うよりも、やはり「分からなかったことが分かるようになった」と実感させることが王道。そんな考えを持たせてくれる講演内容でした。認知科学の成果である「たつじんテスト」は認知科学の成果であるとのこと。いつか学校とともに取り組みたいし、学んだ知識を生きた知識にするための教具を使っているところも見てみたい、この原稿を書き、強く感じた次第です。